

# 第17回日本早期認知症学会 2016年9月17日～

演題名： 認知症予防に対する当施設での取り組み

正分ゆい 1), 吉田 恵 1), 藤山ゆき 1)山田寛之 2)藤野文崇 3)1)エントレリハ,  
3)地方独立行政法人りんくう総合医療センター

本 文：

## 【はじめに】

近年、高齢化が進むなか認知症は利用者や利用者の家族にとって社会生活を行う上で大きな問題となる。当施設では集団体操、施設利用者での日帰り旅行、脳機能トレーニングソフト脳ぼちを利用した脳機能トレーニングなどを取り入れながら認知症予防に力を入れた取り組みを実施している。そして、軽度の認知症を有する利用者には、当施設職員全体で誉める際には口頭だけでなく手に触れることやジェスチャーも交えて喜びを共感できるように取り組んでいる。前述の様な取り組みは認知症の維持・改善に有効であったかHDS-Rの得点を指標に後方視的に検討した。

## 【対象】

H27年4月～H28年3月の間に当デイサービスを利用した64名（男性：27名、女性：37名、年齢78.8±8.2歳）を対象とした。

## 【方法】

H27年4月～H28年3月までの利用者のHDS-Rの得点を指標として後方視的に検討した。なお統計処理は対応のあるT-Testを実施した。

## 【結果】

HDS-Rの得点は初回介入時21.7±5.8点、H28年3月では23.3±5.9点であり有意な(P<0.05)改善を認めた。

## 【考察】

これらの結果、当施設で実施している集団体操では多くの利用者が顔を合わす機会となり利用者同士が顔なじみになれることができるため軽度の認知症を有する方にとっても安心できる環境作りに有効となっているのではないかと考える。そして、日帰り旅行は多くの利用者が参加して実施するため全員が安心して環境の変化に順応にすることが出来る中で多くの快感を伴う刺激が入力され認知機能の維持に貢献していると考えられる。脳ぼちは、利用者単独で実施することも可能であるが認知機能低下している利用者には介護者が援助して実施することで無誤学習が可能である。そのため、利用者は計算課題や記憶課題に積極的に取り組むことができるため認知症の中核症状である記憶障害の維持・改善に寄与している可能性があるものと考えられる。